[illegible]戈類纂

十八下

和書門 類 二五二二三號 九七函 八架 四九冊

内閣文庫 和書 類 二五二二三號 四九冊 一五四函 三架

内閣文庫		
番號	和	25223
冊數	49(	20)
函號	154	20

国立公文書館 National Archives of Japan

上にも見えし長谷川与五左衛門組子の勝利を始として
音上て中々なる越後の侍共も長谷川か手きゝや
と声々に感し聞かかりし武田の人々も無念に思ひ
千鎗諸士あるの勝負にあらはし足におはんとひしめ
く所に雄信公作ける鬼たとあさむく表工つかあれ程の
勇にあつかく組とられぬる仕合に武運の尽たる処
なり兼てより組子の勝利ちかひしに上は海中猪
かき付るつき遠き書せは多く侍の名おちなり君子に二
言なし一念はつく共二念はつかしと云る古語に任せて
海中猪に死今日より越後へ無手せぬとてひしめく

大日本帝國圖書印
明治十二年購求
鈴木重壽南山樓珍藏之記

手塚か其のたけき心を感して甲府へ入けるまゝしかるへそる
中野下野越後の北須田か事長谷川手塚の
下なり義清（清）頼本意の外も帝房の北威勢には
長谷川か手か組み比類なき功名末代の為翻と
云し須藤坂円一党を出ける故なり　甲信発向記
小早川か家の侍栗原河内守と名乗る者あり紙前より
又花の城を中島より討て毎年丸山尻と合戦
数度に及て終に合戦の時敵と名乗る栗原河内守と
敵と太刀を抜て組んとせしか組んと見へしか左右に
河内守組負て敵におしつけられ首を二刀にかく
きりける時河井若六と云し侍北須田か軍兵と名乗て
法師武者河井若六と腕を合せ合戦し中に脇
を見れは栗原河内守敵に組まけて既に討たるをみ
て同前して河内守を討せるまじき合なりと思ひて
若田持たる腕を北須田か軍兵に切つけ宗の実る
け河内守か上に乗たる者を引返し押へて河内守か
敵の首を捕せる北須田か軍兵と名乗者を引かけ
きさ君なくおしへとる和に河井若六か下人又六と
云し其の北須田の軍兵に走りし合力まてうち伏
首を討捕て若六に首を渡さんとせしを若六か

回汝が身柄なる討に健と刀 無比類働きなり汝が名を
せよとて某下人の名名なれて河井藤六が名をなして一
命を全てさうしと栗尾河内ちうかかさらしを其以
の者弟にかさりける河井藤六後ハ河井源太夫
と云しはうらしくして 本多の陣参りしけるに依
て右の場の趣を尋しに我よりハ云かしくねめくれ
語りしを望たると有に付て其場の様子をかたれる
とて委しく語るを望しに右の人のかきりたる
にかしも違ハれ 前田侍
利家公は越中多賊の城際にて返討にしたりける

取に佐し此後一ト廻り組頭をしける杉江兵左衛門と云
との地承る所に利家公の御尾張丸乙丸葵といふ者
その頃甚前にて来たりける生胄にて彼兵左衛門
に渡り合引組て谷へ落上を下へと返しける丸葵
下に成てそれに首を捕れと兵左衛門刀に手を掛
る所を下より丸葵小脇指にて突指ちらし丸を二刀
さしおしと返し続に杉江をおし付たる然れとも
丸葵手負されて息休みる所に片山内膳来りて
伊東十蔵といふもの後より来りて丸葵をおし返
首ハ我討といふ様にうたれて利家公のは前に

集りん家　まち軍記

古語に合戦ハ武田信玄二十余度と申者を小室又
市組討仕り最期ハ将の第ニ積 其上刀懐中若の此
積り申付甲冑に身力の旨右十余度将に紀文の遺言
申しつき之刀を渡し右の趣を　検見様へ申上る
ハ武功の者将にかるて万石余の旨上意ありて其後ハ
御目見仰せ付られ右の三ヶ名に褒美として
に腰の物を領仕り　小室家伝

清正一候をとる時武 飯森弟子文 清正の前にて軍法
定せしに凡組討ハ力ばかりにて成る也 剣をぬき 刺たれハ易き
とのなりと申を清正組討ハ危き也なり勇ニ誇る
時ハ必仕損もへしと戒ぬ其翌日清正の真先に森本
馬をすゝむる所に此武者一人寄合けり森本家なる馬の
上より取れハ鎗を投させまずあてゝとしかと兼り之上
ふんとせる鎗を引組んて扱て首を取 清正へ向へ見ゆ
申せしの遠にみなしとハ清正大に賞せられけり　常山紀談

井伊掃部頭直孝大坂の凱陣の後殺気を積て西
国の諸侯招請あり庄に斜設る所多之しく出
院の縁側の手ぬれたる座の亭主捕ハヽも振ると
申付られけれハ坊主共出て探頼を拭ハ件の坊主の額に

庭あり來るを掃部助得たりと見て其方の庭は誰て
給はれたるを伺ふに坊主振向て掃部助をきつと
見たりしが討つけるはおかしさに給はれ来るといひ
ける一説の本客來も見ぬと奥をさましけれは掃部助
申けるは成程除き見へたりさてさてくまくまて参り申
たると宣ふ坊主は猶を好きと仕合なれは勝負かへしいたう
掃部助は此事をつゝきまれけるは此事をも宮を不審に
思はれなし流無つ申はれ只前の境分をなし申候に
によりて以てあさけ事なれは此自の振舞はめ何抔の
訳なそれは振る舞ひはさもなくてはなし置了と申され

なり其時掃部助は右京亮を招きけれは伺ひ申けれは
右京亮城を以討の御り城内より数多打出し
に一人我よりも合せ太刀打合しけれは時に我等先を
太刀付候ひしに敵を切出しけるに先は太刀にて組手
に成しに我組まれけるによりて其手は我等は井伊
掃部助とて今其方我をと討候は孫以て勝るには
きそ誰なる名もて切を免かれるも成ましき敵に我と其方
和睦せは我等は詫人に成る由をあつかひへきとそといひ
あれは彼者宇のさても掃部助怒りけれは我等は武
者の事なれは此場にて及んては自分を討申ても誰か見た

盃さへ給はり成ましし後ハ和睦となりつしと云けるを巻たりけり
後日の證拠ニ方をも巻ひつしとて我等参上との会の席
の拠角の参上との行ありし折て渡し申けれハ其場ハ是へ
渡せられ候へとて渡ありて右の通り申さる故今申たる通り
遠ひハ及まし我等打渡し候證拠の之書取打読し候とて
懐中より取出し候掃部助さて〳〵能取打読されたり凱陣の後
公義へ持参り申さハ早速ニ心きてきもなく数通りを能にて今日
寛元より年余諸事大業是ニ過候所我等ら
ハ被申とも申候うては申されけれハ亭主是を受取左様の
儀に候ハヽ北條氏を上方へ御渡は御了簡候て然るへく候へ

御申候事されけるとて房兵衛三ヶ所へ参られけるとて
掃部助の治童請人是を感しけるとて北條ハ負勝之儀
古老共ニ語のよし古老の語られけるを記し置候北勝之儀
古老何某大坂ニ於て勝之儀馬の例を存られ候後て
已ニ参所ニて能働ありけるを郡のあるとき掃部助見
あい申されけるを見て勝之儀も笑はれなれ共古老申されける
ハ掃部助殿ハ大名ニて一歴々武功も言る名の者なき中ニ我等
か斗りをも塞けたるの者多く候てるまてあかしこきるまて
るつし承りハ北分限ある思ひされけると申されハ当方被ておもて
ありけれハ勝之儀もいろ〳〵申されけれ共中々承知も無候

とて切さつまはるとなりけさしのかれもしき候ふなと云あ
る者ハ称歎し敵も味方も感じ者ハ無分別なりしやと嘲り
けるとなり 按合雑記

大坂陣の時穴沢後口ハ鴨をなり家康勝内の坂田か布を掛けしと大
坂方穴沢左近と勝負をせしか穴沢ハ隠れなき長刀の上手坂田ハ鑓
にされ共穴沢上手なれハ鑓を合せると否や身を近附て引たるを
坂田押付組付たり穴沢ハ長刀にて坂田ハ老武者にてあれハ小高き所
へ落されて仰のけに成し所を穴沢坂田か首取んとて脇差にて身を
かける坂田さる相師なれハ左の手にて穴沢か抜たる脇差の
柄を押へ右の手にてめてに持を抜様付の所をさつくり倒し
穴沢か首を取たれ共今日の高名たる長刀坂田か家に伝り
坂田常に云けるハ穴沢ほとの器量の者を偏して右脇指
をさしたる者我か首を取れしといへき 窓撰識物語

大坂の役五月七日井伊掃部頭内庵原助右衛門か名を称ハ
いまた初めなりしか先かけて木村長門守か陣へ突かゝて
能敵と引組んとしかれ共先へ見へたる所へ親田右衛門
突付ても称柳瀬か一是にて見知せるそと声をかけ
て取合ても称是にて力をそへ脇差をぬきて下よりさし通
弱る所へも称ふ家人近藤か敵を引付も称して首を取も
たり撰地従兄西に伊藤是をきゝて大に感し

右衛門尉よりも上ならは御感不斜候ハんと申されけるハ
初めの者服部にて但其名れて首を組としても勝さるハ
いかなる者也と尋けれハ勝右衛門と申て誰とても有ハ不存候
ところ此者と斗ら言つられ候ケり　新武者なる由
夫より後権柄を執たる仁細川常植元三好等其外諸家
侍軍に殊ノ附者かとなるそや自害ハする者令の色不定
甚夜ハ敵の仁不省にて不可信ハいか様なる者なれともハ人
あまた一人座て討死するにはあらす年の権柄執しハ東伐左京兆
右方下とおいして古今稀なる働無比類事　鎮倉宗満信化
又境に縁類の先途無之元無以来討死も主勝利不詳も

被ける　神君信玄諸手一ツに成七万余一同に鬨の声をあけ
討てかゝる一手揚兵壊去ハたゝさへ以後討崩勝利
被れ引一手揚も信ゝ揚と引て切勝利分よりゝ士戻て
討死其内御ゝ引為与ハ右衛門尉の無念とえへ共馬場
路の敵を防なからも引て切ハ後とゝ二三十人とも
人数自身自ら毛の馬とまへりゝハ不負能を持濱淡
谷のかし見方みなよりて一手揚兵壊迄討てかゝる名
有毛よりといふとも兵壊と定て誰も不共門井三十余騎
を持向ふ手ハ兵壊なり亦備もおしよせつとしてあて首
を取たる兵壊ハ　北附三千二百余一生も不負弥
神君と兵壊斗りと申けれ　一毛兜の毛にて

実は名詮の自性を不有し　物語

岩裂とは三郎晴宗本性ハ岩松なり晴宗先祖岩裂
荒人満高二十六代の孫にて無双の力量の一子あり此童子九才
にして木を引抜或ハ搖折或ハ岩を引裂事を遊戯して
郷人其強力を恐れ隠し岩裂と称して其名呈利
家の将軍上意の年して岩を引裂る凡人の業ならずとて
姓を改むへしとて命によつて岩渕依渡か満高と称し
江州伊香郡の庄を領ける晴宗ハ満高か六代の孫将
軍義輝公に仕へ身の丈六尺七寸力量絶倫なり永禄
八年三好逆心に依て義輝生害其後に越前へ依

落の後晴宗浪牢して其隙に旧領伊香郡の庄を
佐々木家へ奪ハれ憤りのあまり那の時召出して信長
義昭公を補佐して江州へ発向佐々木を攻む此時晴宗信
長の先陣に属し江州箕作城下の戦に諸手を合せ首級
三ッ又馬渕佗現とい勇士聞れたる者と組て首を取る
時に流矢の晴宗か押付に中りけるを抜捨て郎等を
招て我代々勇侍を務て武の法を取つ身郡ちは押付
に中るハ天の為を罰せる郎なり戦死せへし汝ハ佗現る
首を證とせて信長の実へ持て入よと言を遺し郷の呼へ
馳入て討死せ身押付に立しを恥るなり信長宜しく流矢

されハ何とて云んも手ふれを押付にかけしハよろしからす
兆を惜める者と称せしと宜也し　諸家雑記
甲州武田勝頼三郎長篠にておくれ軍の時笠井肥後ハ
我主を勝頼の手より其身ハ敵を押へて討死をせ其住
名今にも残せり肥後か子大谷刑部か浦にて仕へ或時伊井
兵部大輔か方へ参りれて討話の岩右肥後か子抔ある事
ともし其方ハ笠井肥後か子と聞及ひしかいよそた称と
召のまし無為の趣ありけり　名家叢話
又因幡後ハ祖父盛か郎ハ　台徳院殿の御もありけり
長篠にて甲州方笠門書し陣を陥つくる盛か郎と竜雲

あまた敵をおしへだてゝ旗本へおし倒して青しく腹三度
迄取ても上て名字をあらしを城和泉守の陣を流して疾も
武士の一言ハ大事なるものと青く腹立て中ハ来討死せ
ん時三度迄名字ぐじしと云けるとなり　武功雑記
長篠合戦に荒川新八といふ者篠くの合戦に渡て場か
下りて名を呑る時甲の立物に運の手と書たる字
あり籏にもあるかつくしとゑみて敵入て討死し侍りしとなり
いかし誉れたる事のありけるとや　武家雑話一名集
伊達政宗臣内に横地軍蔵といふ者あり剛にして
やさしき者なり或時の合戦に敵をおたさし　あまれ

敵の為中つらけ也討死したりける其後

あまた附けん人の数ハ少なりとも

ちまたにハもれぬ蟻地軍兵　同上

天正六年織田信長公羽柴筑前守秀吉をして播州を
征伐せ秀吉中にて因若大将を承候て中にも申談さくれと申信
長公家の御大将なれハ其方共諸将にハ成つかふれハ加勢に任
仰付とある所に秀吉播州にある附に別所小三郎長治
秀吉を背き三木の城に籠る秀吉是をきして急き
攻討とらんとも地利堅固にして其身に利なし若大将
案其の大将として士卒を下知し攻戦ニ城主三将大将

を討んと廣人を遣也　三の木とはおかしけら　大将一る上かり謀を以て三人
共ニ実信を字とえして首を上させ士ハふる首て共敵の
備なよる二人を集て大将と謀を合せ大将謀を以て
たくさ借て首を落せる事領より直道あ随自分の
働ありたとへとも城主鉄炮に盛かして遅く攻被りか
たし秀吉の同く自ら軍別の大将も枯皮に成たる僅の小城
を攻落さんとする大将出して城の数を守るにも
地の利堅固なれハ急に勝利を難得しとて秀吉も無
りて太刀に手を懸つるハ大将も同しく太刀をぬき去て
私へ中中まて立場立場さかり大将卒分ち其戦場の

勝負を考へあるへしとて塀墻堅く居て大振の陣取りて
秀吉の下知の趣を承て押通す事叶はす大膳をいさめ営舎
に入数多秀吉ハ大膳か営の酒宴の者を指揮して今日の
働抜群なる者の高名逢勝をいはれ軍忠を抽てらる事と
感賞甚し其後程経て大膳手勢斗りにて三木の城の
かさの丸の寄かけて働く城中よりもかさの丸を大切にして
弓鉄炮にてきひしく打払ふ處互に手利なりし大膳ハ終て
手勢泥首あけ誘へ其二百餘人かさの丸おれらおしまかす高き丸の
一の木戸を押破りて小塀を上る城兵北尾口をもるかな
かためて数千人の大膳を能く合せるといへとも大膳別数
にして兼通りに越させる處を能見て打払ひ追付数二三人
手捕にして抜殺し小塀の数三百餘を城中へ返し込大膳
自身の勝負十人餘大膳か手のもの大勢討死すれとも
北勢ひに惡勢かつくし處かさの丸を能なく大膳手合給と
いへとも数ケ所負ひ鉄炮にて左右の手を打抜れし處能々を
さそ大太刀を持て寄かさの丸へ芝居を居て取るに法印武
者一人猩々緋の羽織にて城中より居て追し若大膳
か強て其剛強をゆるされたりかまと勝負を決せんとして
大膳ハ四戦ひ疲れ勝負にならしと見て我首取て名誉て
せよといふにはかの法師武者走り出て一太刀打大膳数の

隍の辺さん為て引よも勝負を見て突んとせる所に
三木の侍大将由井小左衛門と名乗て大膳か後より隙を伺
大膳起立ん処をかゝる所へ嫡子采女十七歳走り来りて
其討たる武者は敵なりと詞をかけて由井に討てかゝる
采女は太刀打なり采女は若年なから剛強にして力量も
大将におとらされは付て討たる所へ芝居にまはる所を
押付て首を取大膳に向つてはや息絶たり此勝負の附
に味方かさの丸へ寄せて一二の木戸破れ中備旗本小塚と
押結る采女は大将の死骸を小屋へ入れ是由井小左衛門
首を取て序日見仕る大膳討死をおしみ涙を流し

なへもめて死骸に成とも討死をへしとて小屋へ入り
離念かさりなきゆゑれ落涙せられ采女をは為之
とありける信玄へ仰上らるへき旨仰けれは采女か名一国
高坂なる若き名無敵といはれし也　右家伝
木村常陸介内に村田藤十郎といふ者あり十六才の時
八王子の城攻に頸取り初陣は引さけ者多り一番首し
と言ふ所へ村田来れり深りしや頸を得たりつゝや
されは両目もあけれ共と云なから城の方へ切て入けれ
其日足軽隍の者と突合互に組み突倒して頸とらんと
為んとするその其側より足軽来へ切て又敵と突合て敵の

頸を取れり我の頸を捨ぬるハいかにとありけれハ首を
存て見苦けれハ法師武者の首に捨たりと云りとぞ
倫をはなれたる勇士なり此藤十郎朝鮮征伐の
年十八にて三韓にいたり勝れたる働きありしが
其後木村か軍法を破りて先へすゝみたる事咎られ
しを常陸介大に怒て其後左様の事あらハ其
足をとりて陣を拂へと云付たり此事を藤十郎
本意なく思ひ其翌日白き羽織を拵へ其うへ
紋をおして唐人の方へ一番にをもむき若者藤十
郎なりと名乗てかけけるに松の木の首取に白羽織の者見

也敵か味方かとて見れハ去不郎此方へ向ひてとみく敵方へ一
文字にをもむ右の者か首取なから中にもぬへき所にあらさるに
松の木の陰より切て出ける討死してけり誠に
者と称られけれハ木村常陸介内村田藤十郎こと
世に沙汰しける惜まさる者なし村田出来をとし
曽ての節其振もなく傍輩ともと喩し翌日討死せし
其出定ハ常陸介其足をとりて陣を拂ハれしと寡
人の國に年ヶ此陣を拂ハれ年寄せてハ何方にかり
戦場をつとめ得るへき此由にて先立て討死をと
とけぬと感し是ヶ家来のさゝへん迄作てあへり

此君年十六七の時分に勇士の業をなし顕れ出人々に
あやしと世に云しとそ　前隠旧跡案内
前總て田舎西荒太郎依光落城に討死のよし其
流の末とまに色々申伝ふ田右衛門討死相残て出る
皆偽りしその時分田右衛門は実兵衛の中に居て京
都へは不登時分の本流は今宮中納言殿先祖の御所
戈河孫市とて者右衛城の守なる本丸にありけるに若
者の切腹の旅に見へて鎧をぬきすてて太刀を抜して出一
人歩ける孫市此所へ切り刀を鋳に納め例へ切て
高く年を寛中記は其は今宮中納言殿先祖の所

お前は者なれは荒右衛門殿とつれまちは其定にて出物
脇とて兵舎は氣は勇士の出首を集めるに候ふへ出光りまて
高城一番の言名任は若は弟にて如其上りて出して出
無は公是你を家の中段をいとりんをも中にある荒右衛門
太院の佐なる縄も弟たり戈河殿集ぬき首なて
此言名すもて如するなりは何よりも高きなりと雖云々の
年に入申さんすると者ある人の年とせんは急わなる討死
出るとて座几に来りさアと云て観念し戈河に首を
渡しける是戈河か其屍の中古館に依て一番の言名を
或此すすに給ける時は将軍　秀次云御代に名井丹波

此は花中将は勤のせつ彼芥河孫三郎が孫また三郎
と云し者を右丹波守と後は名まつ古され孫三郎二代目の
それ首を見へれ若先祖の號也とは申けもてありとあし
なかんに仍而仕る討留見て丹波守後を申けるハ其方祖父
孫三郎と云者悪事の先祖の悪右衛門を討取る溢識にけれハ
成かと悦て討手を得は従中傳へ日記跡をは見えたり
但し世の中なかしきと存しれける孫三郎詳て中を振
丹波守後は見立て凋を促してより是まもて悦び悪名
捨つ討死の振る世に帰りける先祖の加と見えけれハとて悪
それハ尚めのくい中にハ末代の記録に其方の悪名なしとて

首元見ての弛き声あり孫三郎ハ何事もなき是非ハ丹波守
後ち智略順のなるなり是まもて悪右衛門討死の第一位、
且討入を世に知れ武勇末代に残る右孫三郎悪右衛門を
討為しけるもし内府云は存しかりと聞ケ京極主
京方云像と路名し西国に隠居とも怖落城の後
何かは従もなかりしに依て其後芥河孫三郎と
名字先を伝へたり老に悪右衛門を討へしなり
中説あり　在既称説
平将門ハ宮方なり天下の振る舞を人の語りし
ハ宮方の合戦の御味方後軍とは少し附同将門ハ

するを腰つ引のけ自害あるへき折にてんつしに籠前
中納言との小性楊田小平次と名乗りかけ出向ひて
するよ上の同隊を一隊つゝ任かれなかに千石の家の跡まて
一寸二寸すれ乞られると言れハ小平次跡をいさ
ぬきて突んとせし処同隊をやくするより飛下るを
捕ふして小平次と戦ひ終に小平次を突伏若党
に首を取らせ此首を見れ共なかに志ある者とてんるなるに
りぬ矢に当る腫れ乞なりと大谷刑部か浦つ言をかし
其後同隊様の中に首れて同のあせに腰掛て息を
休自害せんとせられしに山内対馬守家の侍柏井大学之備

といひしか馳来りて陰すれてつく同か跡を抜突すして
汝か突すせよとといひて其場をさしてすく死なりかの
小平次突たる跡をぬかつんハ利を得つきるとぞ　備前老人物語
立花宗茂徳をも大津の城中に立て居る味方討死の中
に十時傳右衛門と云者ありとて敵に不徐と捨るなり骸
をも返しぬる城中よりも岩三右衛門か首を返しつれと定こ
しかハ申合を添て返されたり是をも大津の死骸返しとて
勇士死後の譽と申されり　常山紀談
立花左近統虎ハ太閤より柳川の領を籠城しましけるに
より鍋島加賀守つゝ其国の水清正三方より押寄せられる時

三花門中務和泉といふ者を大将にして一千余騎の人数
山際の諸勢を蒙まれ作り恩軍聲の笠符とし肥前筑
と一合戦して名を後代に残さんとて雲霞のいさんで加賀
由緒の面もなく実でかゝる加賀の者は待かけたる事な
れは善をせんとて戦ひ互に討つ討れつ辰の刻より巳の刻
まで戦ひけれ共肥前人数は大軍の事なれは終に
入かへて防ぎ戦ふといへ共柳門鍛冶のたゝかひなれは討されし
流石老功の和泉なれ共叶ひ難くや思ひけん城中をさし
て引退く寄手追かけ三花三左衛門といふ者若くして追かける
老く中にて一しは何事そあれかし諸人の手本にて

一働して名を後代に残すべしと廣言しけるにぞ
しては首けれは今度依兄大将の出城せられける時さ
せる働もなかりけるを諸人嘲て申けるは若き者はことに
合もさる者には舌長き言葉言ふなりと三左衛門を
くの口捻をしては今度此穀なき働して敵味方の耳目を
驚かさんと思ひしに依兄ももと大将もて敵と出合て
る故にも寄されは三左衛門は只口多言の上手なりとて諸
人笑をなしては口惜き事かなと如何しても此恥を雪ん
と肝に通りて思ひ今此合戦首をとらんと其敵の
来朝の大将の法前へ向ひして申しける者の先なるは

自然のこともありけるの義にて一命を捨て殺生の
御恩をおもひ奉るへきとも心掛へきとも武運に叶たる
侍なれは大将の高職なれは能断を遂られは叶たる働も
不仕と諸人嘲を受る職に恥辱身にあまりて成る也
あされは大道捨るは只ハ此度恥を一度受るともまたる
ると仏神に祈りける明日の一戦に危を遂る是そ諸神
の恩護と成る也然ハ成し定たることの社あれハ君の御用
二度かゝるましくはなり只今こそ今生の御暇乞と申
あかふ別を名残をしく涙し大将の御前を立て諸軍勢
とおつれ身をまかせんて出たりける然るに肥前勢

十二段に備を立て寄をせんとて待かけたり柳川勢も
爰をさけんて押しよせたり敵は近く攻寄ると言
よりいさゝくとかり立て陣場を守られたりけるに
又ふみ違ひけりて来る陣をは始さる組に柳川勢の
中より只一人進み出て大音揚て名乗けるは我は立花
三左衛門と申者なり今日の合戦の一番陣を始むるそ
と思はれ敵あらは進み出て此三左衛門か首を討取て名を
後代に残せやといふまゝに大長刀を水車に回して寄る
か庭の上則のことなれは朝日の光と長刀のみの光かゝや
きて天か下雷光の水に移ることく也敵も味方も是

をみて天晴勇士なるやと公に感して見る私に名字
はる詞の下より追まくられ敵の備へど只一人かゝしも
擬議をはさまかゝる其響ゆゑなかく議に勇悦たり
十二段に備へ立たる軍勢を北勢に僻易して見るに
二段の備二つに切くれ中をあけて通しける危と見
大軍のなるなれハ三段目の備に属かゝりまれ犯け死に
を死たりけるをそれを見彼をとめて惜まぬ者ハなかりけ
るかくて一戦過て四五十死したる者その死骸をとて見
たる私に二たまり腹に焼合二ケ付たるを見て諸人ハ評判
しけるハ三四ケ所死を極めたる者ハ破竈を持たるハ必滑[illegible]

し必死に極めたる是ハ有まじきかと云られハ又或老武
者の云けるハいやとよなれし必死に極て破竈を持る
るけるに一大将きさ志しゝ誰も弱そこたきことなれと
感したる者も此者の合戦の法を具に見さる老翁の語
られけるハ此場係彼等のことなれハ依て大将その振
る大将の前にてのことなとハおさえ遁も有へけれ共それハ左も
有ハあれ平生ハ必死と極たる者ハ破竈を持たる也之
兆にもせん為に深き意味を迄つきたることなれハ浅山中等
なくされとも後学の為にもなるへけれと思ひ
具に記しなり　續擬靖正記

松川合戦に岡左内ハ俄勢を引連 松川を渡り
越来るを後ろにして備を立て政宗を待かけたり甘糟
備後守栗生美濃守か中ハ政宗方の武者を川中にて立
わハ上流を一ヶ武者にて家物下々に付て歩行者を
渡さんとの謀なり只今大軍大勢一度にてうち寄てける
左内を守んて川を越つかハれと下知仕候とも布施七郎左衛門
小川与七郎岡田志賀安田勘助等二十騎
斗左内か旗本をや離たりけん軍法を背て川を越て
備けるとかしと宗依民部鉄炮を揃て強る勢を
押つてけハかりの槍を離て大利を失ふ事戦に血

家の血也強る人川を越寄て下知せり去りとも有
て伊達政宗の一万余の勢すて去る事無戦てかけ
来る先手片倉小十郎二の先藤伊達安房守其外伊達
藤五郎成実茂庭石見伊達安芸守浜田
秦桜田駆る備ておし寄けるに御人数ともあまて
二万斗の政宗を一面に成てうへつたり上杉方には岡左内
已に鉄砲をそろつて防戦すといへとも政宗大軍
を下知し左内か勢を引包て打取る斗りに
打なされて囲を切かけぬけ通れ川を渡りて見て
政宗の旗を真先にみ見やまとましくして

押アと云上杉方に小門爲出両田切両党合に向ていふ陳
方後軍なる已に急にして我等討死て残る会津に
殊にし是て十七才の輝虎まてる公元より山内を見られ
て総角兵脱の空しからずして家勝なつて東云はしかば
あはせ諸額大刀として貝足の上に着たる犯く傍の羽織
をぬいて両田切に渡し是をかる見る見よと申すと渡
しかけり、しかりしに両田切申は軍の習我も生死は範斗に不定
とし死を免れて後かられける息つ渡しすとして羽織を
取てかしまに持て追かけ小門今ハ思ひ定めたりとして
川中に取て返し太刀の中へ切入あれ上杉
譜代の侍小門爲出勝といふ大剛の者是今討死せるを見
主て念ずる自分にせまれと太音揚て名乗り合の丸打の
さし物にて一ろを太刀の中へ乗込て十二三人あはせ付く
於そ討死したりけるを布施次郎右衛門内島兵る
同國同じ是を見て上杉の輝虎なるも小門につゞいて
さと是も小荒を親してあ戦ひみるまくらを並
つて討死せり　武蔵守殿は
庄内也治の附寄花城の本丸に攝籠る　根岸郷
左備つハ橋に上野城外の後合味方後軍の獅子を
見て此上ハいつとる朝まつりき名殊の軍して切死や

入りと申所へ焼櫓より矢鉄砲なと放されし其身の際に
押つめたるを見られさき根津甚兵衛をされ突て出る左右に列る
者共二十七人程続て敵中へ駈入城門近く馳寄れとも門
より残る根津隠岐を突おとして刀ぬきて働く刀も折れて後は
脇差をぬきて薙て廻る依て根津か隠居先に刀先に向て討死し
たる者所々に二敵味方廻津武左衛門と云者は深手負て死たる
迄て死たる其外根津も書置る者有しと云へ共詞を替し身を
首も武ハ勝組武ハたのましたる者共ハ捨れて今是を根
津江右衛門ら続出るまゝ入とて入小浜名は　覚宛武鑑
又同七か出雲守殿は其の一手も前にて本多部中ゟは

一段ハは瀧之丞出て然る二段目ニ押ハ三所ハ出合候三分
軍之情は例ニ存立ける時背を見せ候ハゝ振すと申付
之へハ悪き奴とはる敵をは防ぎ出て其背ハ不申
之九は立つるもは不死を恥しみ申ハ必高坂傳中は若は歳
臆揺しは之気の毒に存候ハ其時ハ揺据ニ軍之情は
一手備の背を見せ申付候ハ従来敵前ニ存知へハは當
の為の備を乱さる出て其手をは切捨ニ出て差は出合候とも
いたしては討死のは覚悟にて其後は其後敵陣へ深
く候ことこら知はたと　権現様は御覧遊ハされ
出雲守ゟ人を遣りて是ヲ制止有へしとは申候は出雲ハ

つとも又や森豊前守を倩ひけるを本家ニ居候
ちふしらぬあとへの計ひ申すれてけれハその
後もは実の他有る如くまかり天王寺南門前に陣を取つ
かけかしけ戦ふ者了但し豊前守か一命を捨てお戦故
ハ多勢には味方ハまけて急に引退候也　本多家討死の者
五月七日天王寺表於味方互ニ本多の内ニ本多出雲
守も陸地を退てヶ陣を張本多を見て越前勢よりも
為見を申は一万余ニ而勝一万足軽を揃申は水野日向守
見て大和但先々手勢一万足軽を二ノ手越前衆同前ニ
まて入とも兼仕候へとも大和但の先陣いまた足軽を遣

不叶は本多出雲守ハ乱して前和ニ足軽を呼入倩へ
まけふりて中々危ぶ甚ケ埋中は何とて足軽をおやしに
けさせ只今宗出して申と云出雲守ハ前の戦いれて再ニ
とる実入手ニ出ず是といふ甚ケ埋抜群の英なる人の何と
は存しすと申翔加底力居合をみもて滅ニ此足軽倩へ
ハ果ては絶ニ不見只五元大多勢ニて摩持ニ色々の
之振しあれニつ見さる足軽ハ残しニ足軽ニてはあれ
出て倩よと笑ニ付出雲守ハ底之勝して中ハ英なるとハ
何ニそとて太刀を持てかけりは甚ケ埋ハ只今討死して
手急け用を言て古のうきつそし速も加えたり左遣つハ

今迄なれハ出雲太刀の行実ありて太刀ニ打れ右左馬へ
ゝるよりたゝき落されて後をこゝに只今討死しれ兄七郎とて
先つ出雲時に出雲衛ハ勝隊にこゝ皆るを引付是を出雲
出て已ふハいるの先て追れ路かとて太刀ぬれて後隊へ
掛り其後毛利豊前守組て其日一寸の馬ぬれて
にもの気色と押寄り出くとおみ其形杉形なる出隊
廿日とみれ兄弟たを出ニ年月なり出陣ぬれてハ是
もかなふんと迄くみたる者也と宿田備中守左衛門有る
とゆえて百をとして一るに弟只一勝て衛をと出家なりけり
此者打の者共二十人斗り侍ニハ太刀居た馬ニ一勝殿なり

勘ケ由共かるし手斗りみれ大勢を残り討死せるを見て
勘ケ由討るゝハあけ駆けよしと下知せる處　此打者六七
人も別て駆け内に勘ケ由ハたゝや陸にあけられ
討死を此打者もみな討れ二人は負出雲守是ニ而
迄ゝしつとゆらゆみを見て毛利豊前守組中門孫兵衛
なる森傳兵衛往来甚左衛門ゝ中七へ兵急ぎ只今名字ハ
出るも出雲守ぬかれてあるとて急ぎ出てあらんと陸を返り
つれ云ゝ付越陸待て首を延寄り立上りニ人宗ニ
也出雲守は備の羽織着たる足軽二人程ニ語ニ々ありて出雲
守膝の上を後つよ持て出雲守も不残力を抜馬ニ乗て

下り彼足腕を切付ケ一ヶ所ニ又目を抜せし合の是非抜打
其かしを出雲左の手ニ提右の手ニ刀をもち七八人まて
して切立ケれともあまりの手負ニ其上隠居大事ニ及ひ
所存の通を述ケ小溝を飛越んとして倒る大坂方
立て出雲か首を取んとせるを大兄伝左衛門寄せしとて
出雲か上ニ覆かふさり刀を振切てる山立とも多勢之敵
ニ候ニ伝左衛門も討れ出雲首ハ取れ候死骸をと見るに
伝左衛門か左の手ハ出雲か死骸ニかふせてさすかにて出雲首の取ニ不合出雲
ニ討死也大坂方の吟味ハ出雲か懐中より証拠付寝候因
伊予守ゟ宗徳右衛門御同左一ヶ所山下兵太夫ニ八隠を

合ハ小傳色馬ハ下知仕候者と云ともなくとも
御所ハ感状下されハ三色軍之儀ハ一高ニ有之所ニ
大坂方大刀武者かけ申候軍之儀頼候ハ彼ハ大刀ふるまる
家之隠の旨ニよれ成りしと思ひ陰を語右ノ手二ヶ所をとれ
御の時ハ一高隠とかゝり小傳と二ヶ所立る兄弟懐中吟味
ありて一高ニ高名を擲ゝ宗家之儀ニ而ハ此旗本
よりの字八宗田に記之儀一類ニ隠を今も但し
宗田北宗之儀を見て宗と返ニ而寺に記之儀を
隠を不申候ハ付此宗之儀出雲小左引物字ハ
仕る擲宗家之儀も立之退後絶断ニ年仕り出雲手傳ハ

是をハ不知敵ハ後へ切ぬけ城際まて来る所に出雲討死
したる由を聞て彦四郎も合戦場ニ帰り出雲死骸をハ家来
百足ヶ鶴坪ニ急き左衛門尉と共ニ其年四方へ切を
見付出雲か首を乞請て供に出雲頸ハ兵衛門にてぬさき、
てくる足奥をかさして泥中へ捨たるを家中の者又見付たる
而して持帰り候　右伝聞其也
若江道明ち矢尾合戦の時又三郎鎧能にて腰の上
をお捨る今ハ底岩にみて働くる事不成是口惜き事也
念頸とうさき後也と向あとかみて捨を拾出し敵の
掛るを待ちたる会方平左衛門余るやて肩にかけて退け

ハれを続しくとも大勇にて能もたる者なさし其の上
家にて死也と振切り候落能り見へ申候又三郎甲をぬさき
捨敵の兵多急ろるまて捨もと申候去年左衛門刀を抜
又三郎首をおと下の間へ埋め平左衛門退申候又三郎生
在中存ニ於ハ敵にも味方にも惜み申候又する事也と云
ゐ不及事にて討死　右同其也
木村右門も後ハ敵とも家にかけ被ちつてくとも大勢ニ
て大勢ニ取籠られ手へ落へ討死仕候能右門も後ハ
勇者にて其後右近殿に申あらそひて太刀疵の上に
それよる者ハつられ退付ともの名しかつける事よ

庵原助右衛門鑓と名乗候て合せ戦ひ給ふ後は首つかさ
れハ長門守引よせ給ふ長門守は庵原に勝かけ急きを
つき給ふを御覧じ給ひける味方一勝もなし助右衛門答へ
ら御作は運命尽てたり同じ罪を申さんかはさやくをたのみ
申さんと御作助右衛門答る所にて候を我に助をえさしやん
候待れと時刻移りけれとも長門守答遂に御に無念
長三郎答安藤来り申候を指出す汝か首を取るへき名に
もせよと仰候長三郎答もなしとて見み来り候へハ長門守
とのら申ハ運命尽てはれハ半南ものさきぬる事申て
討てと申をめさき首をさしのへ候待候を討りけとて去り

かくて討死候由注進の事　若江御合戦事也
木村長門守佐井家人の浦江内蔵か討死ハ未し長
三郎にいかなる者とも不しる佐渡守申さる三郎か内
にやり死したりて死せる首の鹿とのハ首ましと
いはれし　武功雑記
男にて先年伊豆吉佐井義定の代に下野国カスにて乃
佐倉にあらつとしよんかくりて討いお死にて其子細ありけるを
去ル日の合戦にあらつの御家とも動きを成能きそめて
おさ右細ありの事を成かく首を成りて其細あるし
人の腰に巳さきとかし鹿を付けるを家りて竹市答れ

前につれ来る也甚疲労として信濃より信付候の
婦人と手柄ありし帝室の首を取りて死去なりと実来まて
人々誉たりと云し　前書類
実は子陣の内附内中甘利内甘利甚甘利となりしみとの
子世して其後月も甚甘利と中なりける十二年すて践
場にある甚前後士数を実傍て一ヶ所彼等を抱かし
首を取もけるよし人大に疲労し左京甚内ち殺條目に内中
ら方へ来臨して雑話ありしに甘利右の色けを指揮
あり其内大に感し何にも高く血をもちよる彼
命等たとも百もしれ無くも疲かれけるにかのとの

中者るハ言よりいたさ卜しけるに時刀を攄てかゝりつき
とるへくと攄ひけるを高坂か耻しめられ震ひもなかりし
甚て首を取たりとし家来甚内によく感し豈勇士の
言ありし震ハそしてかゝふハいさゝ其違方を兼てぬ左
あらさとうもしこハ耻らしめられてかゝらしハ第を前て
いさしけるよと称号もなれしと云し　信玄公家
檜院瀧藤沢山西へ働ちもの手て勝頼も出馬し成れハ
かくれあそひを浮めりともものへ郷にて大井門まて見ハ
根津甚也の者ともや濱吉荒一人返さぬくれたるを
甲州の先手なる方勝ありて取囲む尾宮左衛門近付て

一人の敵を大将にて討る事にあらんとて人質
をとらし甲州へ下し連勝頼ひそかに味方に属せ
下しとなしかは只首を切れよとかく承引せて深く
義心を感しかるしきは誠に死を深くして生を
軽たるとぞ彼人質の溺りし久野長志命に北るを
語りしと云り　同上

志田左馬介依り大将にて相張て一命を捨せし者の後の
中よりたへては木曽甲州の化法方よりの事親の時
後ちに申し入れての者なり化法勤めたるとの
者くて心能くまんも志田か誠とうたしあるまじき

大言ありと云ものぞ傳は云事もんにて見限られたるか
いさぬとのあるよく嘲めと云つり志田か従の竜ばかりなれ
大言あれて忠誠とはいふぬるべし　菊池陪

美濃國本巣郡鵜飼の城に松平右馬介親吉との取
討寸ば備中の白石郷の羽織着せられそれにて高名あり
中川を右若石丸見ずして走りける所備の小者に
つは掛者あらしもよりあいは不中右馬助名を捲し迄て首を
さ付与抱侍りけるとらけ其つ拝扱すまるの侍別ち
右之通なり　菊池甫節宗出

寛永七月年翌関山へ出陣押の者出兵は本多上野守

西總長子右衛門之丞秋元但馬守三組ニ而押庚申堂
前備ニ差出し内ニ而敵の擬たる掛視を本案合上野とも右
衆の右之方諸陣を打合候得ハ其の者三者共辻の士先鋒そ
とゐ城陣を越ニ同勢へ掲るとて右備ニ成候而石川主二
候るの先へ差遣掛り候　本多上野も如何ある所のゑる事ニ
去差異差有之右ニ而住和とは此ら如へ凡家のもあへ候
陣取ニ旗へ備る後陣ハ是を見て陸武者御目人足兄
かり前れ参れとら見て敵そと見切て安西但へ差遣かゝる
それより永井右近備て前れ尾張の御人数も常陸
外陣御人数へ差遣かゝりし所々満備森候見分まて差遣ある

もありて又ハ尾張之通進候たるもあり　しかしなから大坂御陣先手
福嶋左衛門大夫御府詰ニ而如此候合の節井伊掃部頭
ハハ世子被下れとも御付為遣候ても御留守之者共ハ御用
不足者ニ候如ク大坂の時の為ニ御在府候謹ニ陣者御候ニ
を江戸ニ在府候者見へ御付下置候儀も左方へ申上候不届
候ら御家中ニ而住居なく国へ在国させ申分住居へ御付
て御年寄衆其上様子ニ而私而も御付ハ備後へ申上候ら申候
ハ私藤堂和泉守らも申ハ若者共吟合中分住居と申事其後江
戸ら御付候て福嶋家之者ニ而能人を数多抱申候所　小路
軍之儀何事も申上ら申所其上ニ而掃部申私家中申候

の中路軍仕ることなりなれハ先年出しハ後て用ゆ
右田の者共ハ古銭の由緒書付替候鋳与其ハ下
知すて貨幣の城とて井伊掃部頭と云ふ氏真ハ城下
つち百姓ら仰付る所中路軍と成る事ある忠兵衛ハ是
昔年の代中路軍何方より為有る事不案の其方仕との
中路軍事なれハ先ハ陀羅尼中にてハ和泉古国ハの
稀なり○○○云ハ不力掃除論争仕候ハ談合取仕合は
御用ハ申す先切も通者ハ一つ定て有ることに仰ハ是
ちかハ　池田出羽守先出
古し一つ毛利元就代に防州伯州雲州備後数年の取合

成りたるに数ヶ所の城を攻落しにある所の城にて云
銭ありきるに口上続しては其の事を争ひたる者ありてハ
云銭にハ不案甚だ毛利家の同朋に御伺たる者共にて
ありて鋳し云事銭しけるに同朋に云事に元就ハ不のとつ
ふを以て治めたる者といへ誤鋳案にて不得るとしあるにハ
古き案仰つたりけるのとつかといふるにハ未案詮儀しき法に
家の治め様も他法遣よつしと云ふを同朋云誤りたると
味方兵のあせを捕る所に同朋中したるハ云銭にもある者
として来るとのことを不案者代
古しきハきまておそらい論りけれ

たゞあとのかたを惜みてそなき
と歎けるもかくよめるも少ぬ言葉をたんより只中をぬきて
皆余せよと云て其骨の言葉残ハ止めんて同川の言語残語て
得りけるに其骨の歎何との集まりたる歎そ銘うすを定て
時の利を得たりと云けれハ同川ハ同諸歎も時の気前之歎
と不負ぬと取て利とそ集を極めて何うせんとて定めたりしと
也其後とても加振の事首まりきるにあハれ色極の人ある
とて中世の古人語る　前西德
吉尾の城の秋月人数さし寵ける利の太宰方石松源五郎
諸掛每度合戦ける一度も後れを取ハれ其名皆德

又郎ちるうれとも居城の比所の下あきされ石松のなしるの
に其後秋月と合戦ける石松年人と名字られハ秋月
勢毎ハ源五郎ハ向ハさりけるそ一筋の道ちふしれ其方
かくる石松家をせんとて合戦るれも歎るにともせんまて
かくれハ石松其の幕引退て或も石松今度一戦にまけ負ハ
しるす年人のまに名を爭ひ其ふりとて下されたる名を戻
して元の源五郎に成まらるかくて色て秋月と戦ひ
しま件の源五郎と名字で定て人られれハ秋月勢强
止めんれ色の侭字ハされハ人々に称ハれたる名をハ孫
つきるにあハれとなそ云うるも　大友記

謙信信玄と和平を結ハんとせられし時長老ある
の僧を使者とせらる此僧ハ通説の人なり謙信かの僧に
甲州方の士に向井与左衛門といふ者やあると問ふに是あると
申す又剣の説あるやと問ふに甲州方の厩にあると申す謙信の
云川中島の戦に名字を定て掛り実通を殺さを振顧て
一刀打たりしをかしこに聊も思ひけるにありしに
多るまに存して底其所の胴肩衣に隠の説あるを為まして
出家を遂て向井へ遁られたり是をせるにかえり感
情とりて甚其中に川中島の名を戴られたりしと
りつる　常山記後

大友家譜云天正六年戊寅十一月より臼杵中勢を
出もりたる豊後の城々に打出られ後陣として嶋
津薩摩守義久大隅薩摩日向三ヶ国の勢を催し
日向国佐土原に来れハよし宮へつられハ土城とも落さ
さるゝに高城をさへつ拘れたるハかけ引あしかるへし終に耳川
迄引退き軍場ハ耳川の前後を定め耳川の方へ人数
を操越けれハ義久耳川を越て来り陣をとる味方を
耳川の北方に陣を取義久の陣場を見渡せハ軍
神の如しての形勝したりとみえて陣屋の様に向き
繫を立しるに備に向其山をとく陣屋の旅ひ申し

なくなりし豊臣幕下の正気をもくれて数ハかく候ふに
宗鏡云ハ佛神を恥さ出て衆くの社壇悉く佛を
とりすてしあしき事の法を作り或ハ薪のおしもの
かく前代未聞の悪行なり今窮の所謂もかくしかし
とりそさまやまり　大友記
士ハ信仰をせんして居けるとは誠に是等ハ帰ハ別に
信仰ありつくは孫共の者たちなとハ其国には無き君き
財共の悪路を読しまりたるつは免角共を食ふしてハ
何するも如かさかるへし　細川両家記
毛利輝元は関ケ原の時宗聖山宿坊に勝利の祈禱を

正頼勝軍と成なり一萬布施を上かし也施ろの彼
寺りの依て山刹十ケ出け所と上む門閉陽半らの成り輝元
不思ーして宝聖山の宿坊向後且形を可上とて正盛
祈禱師の云佛力神力ハこの身ふれたる事施軍の祈へ
感應あり此徳者共も戦場へは出る楯の柄を振り自
身は勧骨にて必感應あて勝利うしろしみなさに
大将は出情にて陣地の者たちは出かなくとは何
とて祈禱の力有し勝利一の義祈禱半らなて勝
利あるハ出高山ふかしハ天下をて取なれとも不叶
と云ぞ輝元豪傑なり　武辺雑談

大日本帝國圖書之印

国立公文書館
National Archives of Japan